

語学教育における異文化導入について

孫 淑華*

Introduction on intercultural through linguistic education

Shuhua Sun*

はじめに

現在の世界には、経済グローバル化とネットの発達にしたがって、異国間の商品流通、情報交換などが前の時代より幅広く速やかに伝達されている。各国間の政治、経済、科学技術、情報などの交流は、重要であるが、異国の歴史、伝統、宗教信仰、風俗習慣、社会現状などに対する理解と尊重を基礎とする異文化の交流は、もっと大切になるのではないだろうか。異文化をより深く認識、尊重し、成功にした企業が少なくないだろう。異文化をよく把握するなら、ビジネスの往来、貿易取引などがスムーズにいくのみならず、国と国の間の関係も友好的に発展していく。逆の場合には、友好的な付き合いと相互の利益を達成するどころか、トラブルが頻発したり、戦争になったりすることもある。以上はマクロ的な考え方だが、次はミクロ的な角度から見てみよう。私自身は中国にいた時、日本のごみの分別収集、それにビン、カンをリサイクル資源として出すことも分かった。しかし実際はそんなに簡単ではなく、さまざまな詳しい決まりがある。日本に来た一回目のごみ出しを例としてあげよう。自分はキャップが付いたままビンを出したが、他の出されたのを見たら自分が間違っただけに気づき、急いで持ち帰ったことを今でも思い出すと恥ずかしいと思う。その頃そのような失敗がいっぱいあった。異文化に接触するのに言語だけでは不足だと深く感じた。だから語学教育では異文化に対する理解と尊重を内容とする異文化の導入を著しく重視すべきであると思う。

異文化の導入は、多種多様な形式が存在するが、本論では語学教育中の異文化導入に対して検討しようと思う。筆者は中国語と日本語について研究しているので本論で挙げた例は主に日本語及び中国語と関連するものだ。日本の世界各国との交流は、古い時代から行われていたが、現在では政府、民間団体、企業間などの交流がますます増える一方である。日本法務省の外国人の入国状況、日本人の出国状況などの調査からみれば、平成10年～14年の五年間だけでも、交流の頻繁さが見られる(表1)。平成14年における外国人の正規入国者は、5,771,975人で、前年に比べ485,665人(9.2%)増加し、過去最高の記録になり、平成14年における日本人の出国者は、16,522,804人で、前年に比べ307,147人(1.9%)増加している^①。そのうちには、留学を目的とする文化交流が大きな比率を占めている。もし学生が異文化をよく理解すれば、今在学中にしても、将来社会に進出にしても、両国間の友好関係を深めることに大きな役割を果たすことであろう。どのように学生たちに異文化の理解を求め、両国間の文化交流に意義ある貢献をするのだろうか。その役目を果たすのは外国語を教授している教師ではないだろうか。教師が異国の言語を教えると同時に、言語と関連する文化知識を適当に正しく学生に伝える責任もある。広範な異文化から学生が関心を持つ所を発掘し、実用的な内容を適切な方法で授業に導入するのが何より大切だと思う。

* 大学教育総合センター(外国語教育研究部)

年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年
入国者数	4,556,845	4,901,317	5,272,095	5,286,310	5,771,975
出国者数	15,806,218	16,357,572	17,818,590	16,215,657	16,522,804

表1 (法務省ホームページ : <http://www.moj.go.jp/TOUKEI/>)

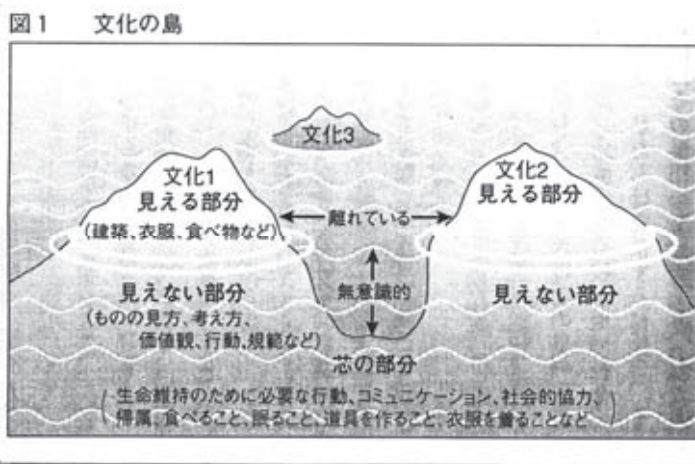
一、異文化の定義と相互関係

日常生活でよく中国文化、日本文化などの言葉が耳に入るが、いったい文化にはどのように定義を下したらいいのか。文化を提起すると、自然に文学、詩歌、音楽、絵画、哲学などのものが頭に浮かんでくる。実際、文化の範囲は、広くて生活の至るところに存在している。

岡部朗一は文化について次のように定義している。「文化とはある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間、空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成である」^②。それから文学、詩歌、音楽、絵画、哲学などのようなものは、文化の重要な一部であり、言葉、習慣、風俗、常識などのような日常生活と切っても切れないものも文化の重要な要素である。

異文化とは「生活様式や宗教などが自分の生活圏と異なる文化である」^③。言語を勉強する目的は、異文化を持っている人々とより円滑にコミュニケーションを深めることである。実際に生活の言葉や習慣、常識などが違う文化背景(異文化)を持っている人とうまくコミュニケーションをすることは、そんなに容易なことではない。

異文化間の関係は図1のとおりである^④。その図を見ると芯の部分即ち生命維持のために必要な行動、コミュニケーション、社会的協力、帰属、食べること、眠ること、道具を作ること、衣服を着るなどは



どの民族でも持っているもので、世界各民族の共有なものになる。水から出る部分即ち見える部分はぜんぜん違う。だが、見えるから学んだり真似たりして理解できるかもしれない。そんなに難しいと思わない。一番難しいのは見えない部分即ちものの見方、考え方、価値観、行動、規範等である。見えないから理解できるようになるため、いろいろ試行錯誤しなければならない。

二、語学教育における異文化導入の重要性

「言語は文化の掲載体である」とか、「言語は文化の一部である」とかのように言われる。言葉は文化を構成する一部なのであり、言葉は価値観に支えられている。つまり、言葉を教えることは文化を教えることである^⑤。また言語はコミュニケーションの重要な手段でもある。語学教育には、教師は単に「言語」を記号として教え、学生はただ記号として言葉だけを習うなら実際に異文化に接触する時、言葉そのものの理解だけでは解決できないことが一杯出てくるわけだ。例えば：「_____は_____です」という文型は日本語に触れ始めた時、最初に勉強する文型だろう。断定を表す叙述文が誰でも分かるはずだ。しかしレストランで友達が「私は鰻です。」と言ったのを初めて聞いた時の驚きを今でもはっきりと私は覚えている。なぜならば中国語で人を馬鹿にする時そういう言い方を使うからだ。したがって教師自身がよく異文化を理解するうえで、学生たちに異文化に対する理解を求めることが大切だと思う。そのため教師と学生が互いに学びあわなければならない。特に語学教室で教師は指導者になるだけでなく、一緒に学習者になるべきである。日本語と日本文化との関係について角田三枝は、「日本語を勉強しても、どういう場面でどのように用いるかが分からなければ役に立たない、あるいは日本語は日本文化の一部又は文化を反映しているものであるから、日本語を学ぶためには学習者は日本語の文化を理解しなければならない」と述べた^⑥。

次は簡単な例を挙げ、異文化導入の重要性を述べたい。日本語はあいまいな言語だと言われる。普通の日本人は「言わなくても通じる」のようなコミュニケーションを尊重してきたので多くのことを言語化するよりも言語化を抑制し、人と人との間にかもし出される模糊たる雰囲気を通し、理解が成立すればよいと考えている。例えば：

苦情（隣同士で）

- A ごめんください、203号室の鈴木です。
- B はい。
- A ああ、これ、回覧板お願いします。
- B ああ、すみません。
- A このごろ、本当に暑いですね。
- B ええ。
- A 奥さんの所、クーラーがあるんですか。
- B あっ、いいえ、うちはクーラーって好きじゃないんで、……、
- A そうですか、うちもねえ。夏は窓開けばっとなして、ちょっと通りの車の音とか、うるさいですけど。まあ、暑さには勝てませんから。お宅はいかが？
- B ええ、うちもうるさいですよ。
- A でもねえ、まあ、仕方ありませんわね。ところでお宅のお嬢さんですが、ピアノがお上手ですね。

- B いいえ、とんでも、、、
- A 一つお始めになったんですか。毎晩遅くまで熱心に。
- B あっ
- A 将来はピアニスト目指していいですね。
- B いいえ、そんな
- A 本当、いつも主人と感じてますの、お上手ねって。
- B あの、そんなに聞こえますか。
- A ええ、楽しませていただけてますのよ。

、、、、

(「日本語例文問題シリーズ12」より 土岐 哲、村田 水恵著 荒竹出版)

これは日本人が苦情を表す普通のやりかたである。日本語のあいまい表現を了解していれば、分からない人は一人もないだろう。しかし、もし中国人にそういう文化を教えず、言葉だけ教えたなら自分の娘を褒めてくれると思う人は少なくないだろう。そのままにしたら、お互いの誤解や摩擦をやむをえずに生じ、トラブルを招くこともしばしばあるだろう。これからは国境を越える国際交流がますます盛んになっていく。それにビジネス世界はどんどんボーダーレス化になっている。学生を順調に将来の生活に慣れさせるために外国語教師が言葉を教えると同時に関連文化を紹介するのがどんなに重要かはっきり分かるだろう。

三、語学教育における異文化導入の内容

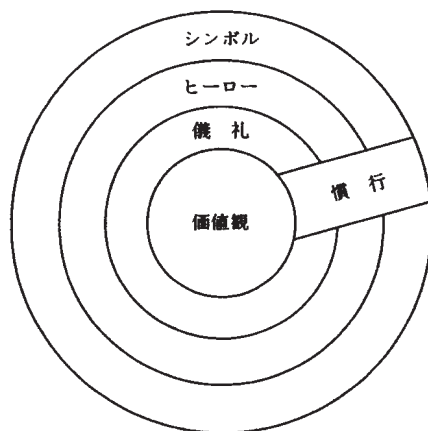
異文化の定義からでも分かるが、異文化の内容は幅広く多種多様である。したがって、語学教育過程において、どのような内容の異文化を導入するのかは、現実に予め解決しなければならない問題である。文化を知識文化と交際文化に分ける主張がある。知識文化とは異なる文化背景を持っている人と交流する時、正確な情報の伝達に直接に影響しない言語と非言語の文化因素なのである。交際文化とは異なる文化背景を持っている人と交流する時、正確な情報の伝達に直接に影響する(即ち：誤解などが起こるもの)言語と非言語の文化因素なのである。定義から見ると簡単だが、文化の融合性、交叉点なども存在するから知識文化と交際文化の関連と区別をはっきりさせ、適当な内容を導入するのは、語学教育において重点かつ難点である。

言葉の意味と作用の角度から語学教育に文化導入の問題を考えるべきだという主張もある。つまり、言葉を教えると同時に、語彙と語彙の作用と関連する文化を導入すべきだとする。語彙と関連する文化とは、ある言語の語彙に含まれた文化の内容と顕現された文化の精神なのである。語彙の作用と関連する文化とは、言葉を使用する時、文化的な規約即ち言語を社会情況と人間関係と結びせ、守らなければならない規則である。語学教育からみるとそれについての文化の導入は以下の内容を含む。例えば：呼称と挨拶、陳謝と謝礼、敬語、謙遜語と告別語、褒美と謝絶、忌み言葉と婉曲などである。このような分類法は、文化の内容の構造を掲示したので、文化の内包に対する認識及び具体的な語学教育において、いろいろな方法で異文化因素を扱うのに一定の役割がある^⑦。

カーターは文化を図1のように芯の部分、見えない部分と見える部分に分けた。語学教育に異文化を導入する時、芯の部分即ち生命維持のために必要な行動、コミュニケーション、社会的協力、帰属、食べること、眠ること、道具を作ること、衣服を着ることなどはどの民族でも持ち、各民族共有なものなので、コミュニケーションする時、トラブルを起こす可能性がほとんどなく、わざわざ

ぎ導入する必要がないと私は思う。見える部分即ち水から出る部分は国や民族によってだいぶ違うが、日常生活と密着しており、コミュニケーションする時、第一イメージになるから導入しなければならない。しかし見えるから学んだり真似たりして身につけられるかもしれない。そんなに理解しにくくない。だからこの部分は導入の重点になると思う。一番難しいのは見えない部分即ちものの見方、考え方、価値観、行動、規範等である。見えないから理解できるようになるため、いろいろ試行錯誤しなければならない。この部分は導入の難点だと思う。この部分についてどのように観察できるかをホフステードは「たまねぎ型モデル」で説明していた(図2)^⑧。文化の最も表層にあるのがシンボルである。同じ文化を共有している人々だけが理解できるもので、具体的には特有な言葉使いやスラング、服装、髪型、しぐさや文化固有の物---旗やコココーラなど-----のことである。ヒーローとはその文化で高く評価される特徴を備えていて、同文化の人々の行動の模範とされる人物である。儀礼とは人々が集団で行うもので、具体的な目的を達成するには役に立たないものではあるがその文化圏の人々にとっては社会的に必要なものである。人間関係の維持に使われる挨拶の仕方や尊敬の表し方、社会的儀礼や宗教的礼儀をさす。それらのシンボル、ヒーロー、儀礼をつなげるのが慣行、すなわち実際の行動である。慣行を通してこれらは異文化の人々にも見ることができ、その意味は文化を共有するものにはしか理解できない^⑨。慣行をコミュニケーションという言葉で言い換えでもよいだろう^⑩。語学教育中、文化についての紹介は建築、衣服、食べ物などの見えることから紹介したほうがよいと思う。そのようなことは視覚で区別できるからどこが同じか、どこが違うかははっきり判断できるのではないだろうか。次はなぜ違うかについて、説明を通し、人々の見方、考え方、価値観などの見えない文化を導入し、学生たちの理解を促す。これは非常に時間がかかると思う。先生は十分にその進度と学生の反応に注意しなければならない。

図2 「たまねぎ型モデル」：文化の表出のレベル



『多文化世界』有斐閣

四、語学教育における異文化導入の手段

語学教育における異文化導入の手段と方式はさまざまあるが、教室でよく利用されている手段として、以下の三点をまとめる。

1、活字の資料を生かすこと。

本、雑誌、教科書、参考書などのようなものを含む。本などを読むのは学生が系統的に目的語国家の文化を理解するのにいい方法である。特に文学作品を読むのはその国の文化の理解に非常に役立つと思う。なぜならば、ある国ひいてはある民族の文学作品はその国あるいはその民族の文化の精華で、伝統的な文化の蓄積だからである。教師は学生に文学作品の閲読を通し自身の修養を高め、創作のテクニックを鑑賞するというを指導するだけではなく、文学作品に含まれた社会背景つまり文化を了解させるために詳しく紹介すべきである。こうすれば学生の作品理解を促進できるし、多国文化交際の意識と能力の育成に役立つ。例えば学生が魯迅の作品を読ませる時、先生は予め魯迅の生活した社会背景を紹介しなければならない。そうしなければ、中国人にもその作品を完全に理解できない人が大勢いる可能性がある。いい文学作品を推薦するのは教師の責任である。雑誌は普通最新の情報を紹介するので、その閲読を通し目的語国家の最新の文化が理解できるようになる。それに以前の文化と比較し、その国の文化の変遷を推測でき、系統的で完全にその国の文化を理解するのにいい方法だと思う。

2、視聴覚教材を利用すること。

現在一般に視聴覚教育に利用されている機器、機材として次の物があげられる。カード、ボード、スライド、ラジオ、レコード、テープ・レコーダー、ソノシート、ランゲッジ・ラボラトリー、映画、テレビ、ビデオ・テープなどだ。視聴覚教育が音声または映像、もしくはそれら両者を素材にして行われるものである。それが言語教育に利用されるにあたっては、それら素材の長所や利点を十分に利用し、音声と映像とが有機に結合し、相互に緊張を保持しあうような素材を利用する時、言語教育の四分野である「よむ、きく、かく、はなす」のうち「きく」という要素と、「みる」という別の要素が結合したような素材を利用する時、その特徴はいかなく発揮できるであろう^⑩。視聴覚教材で抽象的な文化が直観的な音声とか、図像とかになり、ドラマなどの形式で生活の場面が再現できるので、学生に学習力を高めさせられると思う。

3、人を媒介すること。

この人は外国から来た語学教師、留学生、研究者及び異文化に興味を持っている人々を指す。語学勉強の点から見ると外国の語学教師を呼んでもらい、会話、ヒヤリング、社会事情、作文などの科目担当をさせるのは非常に適切だと思う。それに、学生たちが自分の勉強している目的語を母語としている人々と接するのを通し、普通に教室で勉強できない生活及び社会文化知識を習えるようになる。次は日本のお辞儀と中国の握手を例として述べたい。お辞儀も握手もそれぞれの行為が属する文化を代表する挨拶行動である。双方とも相手に対する善意を伝達するために行う。お辞儀では頭を相手より低い位置に持っていき敬意の気持ちを主に表す。また、頭を相手に差し出すことにより敵意のないことを表している。握手では手を握り合うことによって武器を持っていないということ、相手と肌を触れ合わせるという行為で親愛の情、さらに、握るという行為で互いに約束は守るという誠意を伝えている^⑪。ということの本で勉強した。しかし実はその時の姿勢、視線、表情、手の握り方、頭の低さ、手の振り方、時間の長短、使う言葉など、実際に実行しなければはっきり分からないだろう。生活で外国の人々との付き合いを通して自然にその国の文化を習える。わずかの努力で大きい効果をあげるだろう。今本学の留学生が日本人(日本語のパートナー)と一緒に授業するやり方は日本語と日本文化を習っている人々により評判を与えられたそうである。

五、語学教育における異文化導入の注意点

1、各自の文化を尊重すべきである。

国際化につれてこの数十年の間、外国語は鰻登りのように学習者の数が増えてきた。それに低年齢の傾向がある。若いごろからいろいろな文化習慣にふれることは国際的なものの見方と語学力を身につけるのに確かに役に立つ。しかし、単に異なる文化との接触が多ければ異文化の人々を理解し、一緒にうまくやっていると自然に身につくと思えるのは安易である。放っておくと異文化の人々との不愉快な体験から、ただ単に、偏見が増すだけという結果を招くこともある。例えば、海外赴任から帰国した人でも「ラテンアメリカ人は怠け者だ」とか「アラブ人は正直じゃない」といったステレオタイプ化をすることがある。実際、文化背景の異なる人々と接する機会が増えれば増えるほど、誤解と摩擦の機会も増え、仕事はかどらずストレスがたまる結果になることも多い^⑧。

世界の状況を見ると、ある特定の一握りの言語には学習者が集中する一方、多くの言語は社会的に抑圧されたり、抹殺されたり、無視されたりで、話し手の数が減り、その存在さえも危ぶまれている。こういった現実には、主に社会的、経済的な理由によるものである。大勢の人々が特定の数少ない言語を共通に学べば、一見それだけコミュニケーションが活性化されるようにも見える。ところが、同時にその状況は、全体的にみればコミュニケーションの姿を破壊的に歪めているとも考えられる。というのも、世界の至る所でコミュニケーションが強者の言語ばかりによって支配されることになるからである。ここには、社会的、経済的な力を持つところの言語を、それを母語としない人々が、一方的に学ばなければならないという不公平が存在する。ある特定の言語そのものに商品価値が生じるために、さまざまな言語文化の間に優劣感が生ずる^⑨。そういう考え方をしているのは非常に危険である。特に語学教師が影響を受ければ学生に対する接し方が不平等になる。したがって一部分の学生に偏見を持つようになり、トラブルをもたらすにちがいない。種を蒔くように広げると、大変危険である。だから、語学教育で国の大小を問わず、それぞれの文化を尊重するのは何より大切なことであると思う。

2、教師も学生も客観的で積極的に異文化を理解する。

異文化コミュニケーション・トレーニングでは、まず相手文化の理解尊重を強調する。それは自分の文化を物差しにして相手と接することが建設的な関係を阻む最大の原因であるという認識からである。相手文化を尊重するためには、自分の文化を絶対視するのではなく、多くの文化の中の一つであると相対化して認識しなければならない。更に、相手文化を尊重することによって初めて自分の文化も見えてくるという経験的学習を重視する。このような相互理解と尊重があって始めて意義のある異文化コミュニケーションが可能であり、そのようなコミュニケーションから共通の理解が生まれ、そのような理解を土台として初めて共生共栄への方策を生み出し、協力して実行していくことができる^⑩。教室で先生も学生も積極的に相手の文化を理解し、客観的に相互文化の相違点を探し、それを知っておくことが相手文化を身につける鍵である。

教師は学生の見方を尊重し、自分の意見、考え方などを学習者に押し付けないことに気をつけなければならない。日本語教師について吉岡正毅はこう述べた。教師が留意すべき点は自分の意見を学習者に押し付けないことです。特に海外の場合、日本語教師はその時「日本人の代表」のようにとらえられてしまうこともあるから、個人的な考えを一方的に「教える」ことは非常に危険である。

それを防ぐためには、教師が学習者に問いかける形で授業を進める「ディスカッション形式」や、課題を与えて学習者自身に体験させる「タスク形式」が有効だ^⑩。教師も学生も客観的で積極的に異文化を理解するのが語学教育の文化の導入の前提だと思う。主観的に「この国はこうだ。その国はそうだ。」と評価するのは不適切だ。互いに尊重しあった上で、語学の勉強を通し、学生自分自身が主体的に「私はこういう国を見つけた」という実感を得てもらえるような授業はどの教師でも組み立てるように努力する目標だろう。

3. 語学教育に導入する異文化は以下のポイントに気を付けなければならない。

(1) 系統性 どの文化にもそれなりの体系があるべきである。語学教育に何を導入するかは大勢の学者が考えている問題である。しかし今まで具体的な提案がないようだ。教師が言語を教える時、ある文化に会ったら、その文化について説明するのは普通のやり方である。話題がこっちに行ったり、あっちに行ったりし、系統性が足りないだろう。それに、外国語の専門授業では、その国についての事情、或いは概況のような科目があるが、教養科目としての外国語には文化導入に適切な教材があまりないので、導入の内容と方法について、系統的で具体的な規則がない。だから、多くの人々にとって頭の痛いほど難しい問題になった。「これを教えましょう」ということをまず決めるのではなく、こういう視点でこれをやってみようという先生の視点があるそうだ^⑪。しかし私は、「日本事情の場合なら非常に部分的なものの位置づけがちゃんとできて、これがこの学習者にとって将来役に立つ重みはどれぐらいであるか、それをあとで発展させるためには次にこういうこととの結び付けをしなくてはならないという図が先生の頭の中になければならない。そうでないと、授業は面白いけど日本のことについては何も身につかなかったということが起こってくる」^⑫という観点のほうに賛成する。したがって教養科目としての外国語教育にどんな異文化を導入するか、どのように導入するかを巡り、直ちに具体的な教育シラバスを作成するのが差し迫った話題である。シラバスを作成する時、語学教科書、事情、概況および関連のシラバスを参考し、文化導入の原則、内容、方法、手段及び学生の目標などを明らかにする。そうすると系統的に文化導入することができるようになり、語学の勉強に役立つと思う。

(2) 適度性 語学教育に導入する文化は語学或いはコミュニケーションと関連しなければならない。文化を文学、芸術、音楽、歴史、地理、哲学などのようなものだと思い、語学教育中で大量に導入するやり方は間違っている。それは語学教育の目的と目標と相反する。語学教育における文化の導入は語学のシラバスの範囲内でしなければならない。その目的は語学教育の補足になり、学生によく語学知識とコミュニケーションを身につけるように促進することである。それに、学生の身につけたレベル、勉強能力などに基づいて導入の内容を決めなければならない。難しすぎ、優しすぎの内容は無意味だと思う。

教師はよく語学教育と文化導入の時間割りを考えなければならない。大量な時間で文化を紹介したら語学教育の内容と進度にマイナスの影響をもたらすにちがいない。時間が足りないと文化導入の目的を達成できないかもしれない。いろいろな条件と具体的な状況で決めるべきである。

(3) 主流性 言うまでもなく、文化の内容は非常に豊富で複雑である。それに一つの文化の中にいろいろなタイプの文化を含んでいる。高尚な文化もあるし、低級な文化もある。一つの国の文化でも地方によってぜんぜん違うこともある。導入できる内容はさまざまである。例えば：政治、経済、ニュースでもいいし、日常生活の中から選んだ食事のマナー、風俗、習慣及びごみの出し方のような身近なエピソードでもいい。語学教育の文化の導入にどんなことを選ぶか大勢の人々に考

えられている。「なんでもあり」という考え方が普通だ。教師にとって重要なことはその“何でもあり”の中から「何か」を選び出すときの“狙いと射程”である^⑨。語学教育に導入する文化はその国の主流文化のはずである。言うまでもなく、それ以外いろいろな文化も存在している。例えば：ホームレス文化、ファン文化など。その文化も社会とかコミュニケーションにある程度の影響を与える。しかしそれはなんといっても典型的で代表的なものではなく、全面性がないので導入の重点にならないと思う。

終わりに

異文化は学際学の範疇に属する。言語学、文化学、社会学、人類学、交際学、情報学などと深く関係を持っている。異文化への態度は人々の人生観、価値観及び考え方などに影響される。異文化導入は非常に複雑で難しい課題である。世界では文化の摩擦でトラブルひいては戦争が起こったことが時々耳に飛び込んで来る。グローバルでボーダーレスな世界になった今日、外国から来た人々と同じ地域で生活することは避けようとも避けられないことになった。したがって双方が互いに交流しながら助けあい、しかも異文化交流を通し双方が共に尊重し合う関係を作るのはどんなに大切なことである。以上の悪いニュースを減少させるために、順調で早めに異国の生活に順応するために、われわれは一人の人間として、一人の生活者として異なる言語や文化などを持っている人たちとどんな対等な関係を作るのか、どのように対等な関係で付き合うのか、それに自分の母語と外国語の関係をどのように扱うのかということ語学教師が真剣に考えることばかりでなく、教室で適切に学生を指導しなければならぬ。

現在、異文化といえ、欧米についての研究が盛んだそうである。21世紀の世界はアジアの世界だといわれる。大勢の学者がアジア各国間の異文化コミュニケーションとトレーニングについて研究、教育、実践してほしい。

①警察庁ホームページ：http://www.moj.go.jp/TOUKEI/

②古田暁監修 石井敏 岡部朗一 久米昭元著「文化とコミュニケーション」『文化コミュニケーション』有斐閣 1996年 P42

③CASIO電子辞典 『広辞苑第五版』 岩波書店

④Carter, J. "The Island Model of Intercultural Communication" SIETAR Japan Newsletter, July 1995, P15

⑤黒木 敦子「言葉と文化」『日本を知るための本』 アルク 2000 P18

⑥角田三枝 『日本語クラスの異文化理解』 くろしお出版 2001 P9

⑦苏娅「也谈俄语教学中的文化导入」『内蒙古教育学院学报(哲学社会科学版)』 2000, 12 P124---P127

⑧G・ホフステード著 岩井紀子 岩井八朗訳 『多文化世界』有斐閣 1995、P7

⑨G・ホフステード著 岩井紀子 岩井八朗訳 『多文化世界』有斐閣 1995、P7-8

⑩八代京子 町恵理子 小池浩子 磯貝友子『異文化トレーニング』三修社 2002 P159

⑪国立国語研究所、『中・上級の教授法』大蔵省印刷局昭和55年 P105-106

⑫八代京子 町恵理子 小池浩子 磯貝友子『異文化トレーニング』三修社 2002 P33-34

⑬八代京子 町恵理子 小池浩子 磯貝友子『異文化トレーニング』三修社 2002 P13

⑭角田三枝『日本語クラスの異文化理解』くろしお出版 2001 P10-11

⑮八代京子 町恵理子 小池浩子 磯貝友子著『異文化トレーニング』三修社 2002 P28

⑯吉岡正毅、「養成講座の先生に聞く『日本事情』とは?」『日本語を教えたい人の日本を知るための本』アルク 2000 P97

⑰細川英雄、『日本語教育と日本事情』 明石書店 1999 P19

⑱細川英雄、『日本語教育と日本事情』 明石書店 1999 P20

⑲砂川祐一、「実践授業のヒント」『日本語を教えたい人の日本を知るための本』アルク 2000 P95